

第三章 学校教育に期待すること

第一節 自閉症の人の早期教育—幼児期から学校教育への意見

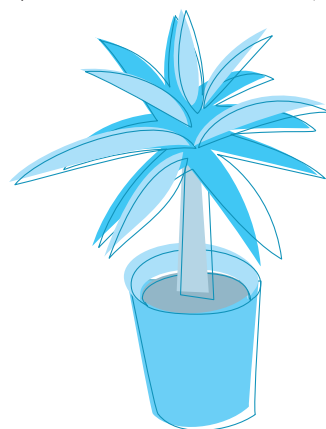
トモニ療育センターには2歳前に自閉症と診断を受けた子どもと親が外来セッションを求めてやって来ます。その度に、私に一体何ができるだろうかと考えるのですが、親は、早期に発見され、自閉症と告げられただけで、確かな向き合い方を具体的に何も指導されていないのです。そこで私は、母親たちに自閉症の知識を与え、子どもを観察する力を与え、家庭で課題学習に取り組んでいけるように努力して参りました。

自閉症の可能性のある子どもの親に「様子を見ましょう」と言って過ごさせる2歳半から3歳の時期に、障害のない子どもたちは驚異的な脳の発達をみせ、ひとりでの言葉も判断力も社会性など全ての能力が開花し、遊びながら、成長、発達します。すでに言葉・対人関係・社会性の遅れを見せている自閉症の子どもは、その間にますます発達の遅れを明らかにし、困った問題行動を出していくのです。だからこそ、本気で向き合って好ましい発達を促していきたいのです。

1. 遊ばせたくても遊べなかった

私は、32歳になる自閉症の息子をもつ母親でもあります。若かりし日に、“幼児は遊びによって全てが育っていく”と学びました。だから、遊べない息子と一生懸命に遊びました。遊びの本を必死に読み、保育士に学び、ひたすら遊びに取り組んだのです。でも、遊びのできない息子は参加できない、のってこない。できる遊びは限られ、結局は二人で快適に過ごせるのはバギーに乗せて外出することでした。買った子ども用の三輪車はずっと置いたまま、さびて捨ててしまいました。

認知障害は深刻なのです。また、そこからくる対人関係・社会性の問題、中でも言葉の遅れの問題は深刻です。遊びでは、自閉症の子どもに決して積極的に関わっていくことができません。私がトモニ療育センターで早期に課題学習に取り組むのは、その経験によるものです。



2. 発達段階という判断基準を超えて

広汎性発達障害と言われている発達が困難な子どもに向き合っているのに、自閉症の子どもにとって一番進歩の見えない発達段階などといった判断基準を採用し、それによって自閉症の子どもにも教材を提供しアプローチする専門家や療育関係者が後を絶たないのはなぜでしょうか？

例えばトモニ療育センターでは4歳少し過ぎで、もう文字とか数というお勉強をさせています。

第一節 自閉症の人の早期教育—幼児期から学校教育への意見

普通であれば、1年生に入ってから学ぶようなことがらです。それに対して、「学ぶことの意味合いというか、それに至る前をどのように押さえているのか。『もうこういう課題を入れて大丈夫かな』ということ、どのように判断されているのか。」という質問をされる方がいます。しかし、遅れている自閉症の子どもに親は何を望むでしょうか？皆と同じように育ててほしい。文字を獲得して、友達と同じように、一緒に学んでいって欲しい。「今は文字を学ぶ段階ではない」と否定されるより、私たちが使っている文字の世界に少しでも招いた方がいい。そこから、親の具体的な希望が生まれてくる。テーマが決まれば、前進できるのです。

3. 学んでいける、教えることもできる

皆さん、どうして高度な課題だと思われるのでしょうか。たった0から9までの数字で成り立っている整然とした数のマトリックスは美しい。数概念のない子どもにとって、数唱しながら、次々に並べていく共同作業は、何の判断力も要らない、始めも終わりも明確な遊びでもあります。

私の息子に文字や数字を学ばせた頃のことを聞いてみました。彼にとっては、私とする1から100の数字のマッチングや五十音積木並べが一番楽しい時間だったそうです。私も歯車を合わせて同じ物を詰めていく作業が楽で、彼との繋がりを実感できた時間でした。私の息子はやがて文字を書くのが好きになって、いたるところへ「2」と落書きするようになったのです。NHKのスタジオ「102」(イチマルニ)が何故かお気に入りでした。102が見えると、因島1号、因島2号、因島3号など高速船が具体的に大好きになりました。テレビの時刻も見え始めたのです。楽しみは文字から広がっていき、私も彼の興味を楽しみました。彼は学んでいける。私は教えることができる！あの感激を忘れることはできません。

でも、マークとして同じ物を見つけている間はよかったです。概念を悟らせることは絶望的な程、大変でした。私が諦めていたら、彼は数が分からないままだったかもしれません。彼の認知障害の厳しさをはっきり認識したのは数概念の獲得ができず、「どちら」「大きい小さい」なども全く理解できないと知った時です。名詞は何とか一つひとつ注ぎ込むことができましたが、疑問詞は使えない。質問などしてくれない。答えることを知らない。おうむ返しです。就学まであと何年？3年あれば、その間に獲得できるだろうか？いつ獲得できるか分からないから、早期から文字に取り組んだのです。多分、保育園年中から文字指導を始めたと思います。何度も話してきたことですが、まだ、「トイレ」も言えない子どもでした。分かりづらい。いつ分かるようになるか分からない。そんな状況で、「発達段階に達していないから」と学ぶ機会を遅らせていいものなのでしょうか。

4. トモニ療育センターの親への姿勢

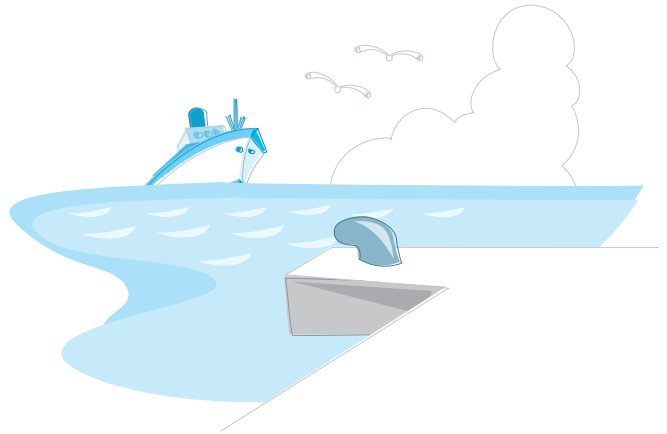
トモニ療育センターでの外来検査は、「厳しい」と言われることがあります。しかし、ほとんどの親は「ここで初めて子どもは、一人の人間として大切に向き合ってくださいました。」と言います。私は母親としての痛みと、自閉症の子どもへ対応の、今までのいい加減さと無責任さに腹を

第一節 自閉症の人の早期教育—幼児期から学校教育への意見

立て（かつての私もそういうことをやってきたのです。）本人や家族が不びんでならなくて、その全てが自閉症の子どもに向き合う情熱となっているのです。

私は親を共同治療者と奉りながら、親をろくろく教育もせず、アセスメントにも立ち合わせない日本の現実を知っています。親は何も知らないから、どうしてよいか分からないから、遠方からもトモニ療育センターにやってくるのです。親が自閉症の子どもを育てる力量が整っていないから、2次的障害3次的障害をつけてしまっているのに、「親は子どものことを一番よく知っておられる」と、大切に敬意をもって向き合い、「お母さんから学んで共に療育していきたい」と優しい温かい言葉をかける。これは、自信のない養護学校や特殊クラスの担任もよく口にする言葉です。医師としての私にはそんな事は言えません。専門家なのですから。

実際、トモニ療育センターで2時間アセスメントをやってみます。ほとんどの親がびっくりします。自分たちが我が子のことをこんなにも知らなかったのかと。知らないで適切な療育はできっこない！親は無知のまま、放って置かれているのです。しかも学ぶ場もないのです。家庭での日々をどう関わって過ごしたらよいかを教えてくれる場はないのです。問題行動をどう考えたらいいのか、全く分からないでゴタゴタを増しているのです。



5. トモニ療育センターの課題学習

トモニ療育センターには、重度と思える自閉症の子どももいます。同じ物を見分ける力も育っていない子どももいます。でも、そんな子どもも自分の興味ある絵本や物には感じるがあります。私たちは可能性のある子どもに向き合っているのです。まず、見分ける力をつけていくためにマッチングをたくさんさせます。見分ける力は生きる力になります。1年2年同じ課題学習を繰り返していくうちに、変化が表れ、学びは加速していき、母子関係も改善されていくのです。また、学習態度は幼い時にこそ付けておきます。自閉症だと分かったら、なおのこときちんと食卓につかせて食事を食べさせます。

私は、遅れている息子を前にして、「脳の発育は、生後3歳までに急速に成長し、その後5～7歳、10歳過ぎに急成長する。12歳すぎからは、もう目立つほどの成長は見られない。」と何かの本で読んだとき、それなら、適切な時期に適切な指導を十分にしなければならぬと強く思ったのです。

私は時期には敏感でした。何もしないでも時はどんどん過ぎていく。親には焦りがあるのです。

第一節 自閉症の人の早期教育—幼児期から学校教育への意見

6. 文字指導について

幼児療育機関でも、保育所でも、様々な原色を使って飾り立て、おもちゃもカラフルです。丸や三角などの積木や色板を使わせます。丸や三角、四角などの形を身近に置くことには療育者は抵抗が無いのです。こんな教具は当たり前なのです。あたりにはおもちゃがいっぱいです。

一体、そのおもちゃの色に、形に固有の呼び方があるのでしょうか？「赤」と言われたら、私たちはどんな赤を想像しますか？無限に赤い色のバリエーションがあるのです。三角も色々な三角があるのです。言語が表すことはできない。でも、文字や数字はいつも一定の呼び方があり、1から100の数字並べも一定の固有の位置がある。五十音積木も配置が決まっている。これ程、揺るぎない不変の教材はありません。いつも決まった作業です。自閉症の子どもにとってこれ程明確な安心してできる遊びはないと思いませんか？

また、街の看板には丸・三角・四角の形だけで用の足りた看板はありません。どこにもありません。でも、数字なら学んだときから、車のナンバープレート、電話帳、カレンダー、昔はNHK102スタジオなどいっぱい数字を発見できたのです。そうして、目に付くようになった数字は、嬉しい親しい存在です。私の息子は数字の2が特に気に入り、2ばかり書いていたことがありました。それはやがてスタジオ102となり、電車の記号の見分けとなりました。形は街に溢れていない。形からはコミュニケーションにつながらない。形は文字より描くのが難しい。色は無限。色も形も極めて曖昧な世界です。

100種類あっても、「45」を下さいといえ、たちまち要求されたカードをどんな人もとれるのです。なんと分かりやすい世界でしょう。マークの区別がつかない子どもだって、繰り返しているうちに、弁別できるようになってくる。発達段階などの問題ではない。つまり、熟練です。私たちは繰り返しの中で感覚が研ぎすまされていく。

自閉症の子どもに話し言葉では指導できない。けれど文字は全介助で指導できるのです。極めて易しい。曖昧さがない。発展性がある。言葉に直結している。余り期待できない話し言葉に重きを置くことはない。例え手の機能が未発達で書けなくても文字カードで学んでいけるのです。書字困難は運筆の繰り返しの中で克服していける。漢字もカタカナもアルファベットも怖がることはないのです。文字そのものは同定ができればよい。見分けがつく力も明らかに成長していきます。それは脳機能の発達ではありませんか？指示がよく通るようになれば、それは対人関係の改善に密接につながり、母子関係が安定することではありませんか？

7. おわりに

私はこれまで、母親たちに知識を与え、観察する力を与え、家庭で課題学習に取り組んでいけるようにするために努力して参りました。

発達段階の考え方では、早期にすべき事がしてやれない。そのことにどのように答えようかと、勢いよく怒りさえ感じながら、思うまま書き留めてきました。

第一節 自閉症の人の早期教育—幼児期から学校教育への意見

あまりたくさんの課題をしなくても、系統的であれば生きる力はつきます。私が進めている課題学習を中心とした療育は多くの自閉症の子どもたちを救うと確信しています。お金も時計も重さも長さも、皆が知っていること、便利に使っている事柄は、何とか分からせてあげたい。私が息子にしてやったように。

